特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ会誌
2007 年 9 月

もくじ

ご　挨　拶・・・・・・1
繁　殖　の　状　況・・・2
シリーズ　足環物語・・・・　5
シリーズ　先生教えて・・・7
世界のツル保護の
　現場から・・・・・・・7
事務局だより・・・・・8

ご挨拶

昨年来、本法人の前身であるタンチョウ保護調査連合を法人とする準備を進めてきましたが、今年4月から特定非営利活動法人タンチョウ保護研究グループとして正式にスタートいたしました。法人としては、これまで行ってきたタンチョウの保護調査研究活動に加えて、講演会やホームページ等を利用して活動の成果を広く公表し、地元を中心とした幅広い方々にタンチョウに関する正確な知識と愛着とを深めていただきたいと考えています。会員の方々には、活動への参加や情報の提供、またタンチョウに関する知識の普及などを通じて本会の活動を多方面から支えていただきたいと思います。

本会誌「Tancho」が法人活動の柱のひとつとして大きく育っていきますよう、会員の皆様のご参加とご援助をよろしくお願いいたします。

理事長　　百瀬邦和

特集 今年は何組の夫婦が巣を造ったでしょう？

正　富　宏　之

4 月に「特定非営利活動法人タンチョウ保護研究グループ（以下、TPG という）」が発足以来、大きな作業を二つこなしてきました。ひとつは標識付け作業で、もうひとつは、空からタンチョウの繁殖状態を調査する、いわゆる“飛行調査”（非行調査にあらず。念のため）です。

二つの調査とも、前身のＮＧＯタンチョウ保護調査連合時代から行なわれていて、とくに飛行調査は、1980 年代初めから続く、由緒ある（？）伝統行事です。想えば、最初に行なった 1982 年の調査は、総飛行時間は 7 時間 55 分でしたが、今年はなんと 122 時間 48 分！まさに今昔の感に堪えず・・・、といった懐古的な話は別の機会に譲るとして、ここでは今年の調査の様子をお伝えしておきましょう。

ただ、この会誌で、毎年飛行調査が話題になると思いますので、そもそもどんな調査なのかを、最初にお話しておきます。

なぜ飛行調査か？

まず、なぜ“飛行”調査なのか、です。
今から 40 年前、タンチョウの巣探しはまさに難行苦行の連続でした。朝から晩まで湿原の周りを終日走り回っても、収穫ゼロだったり、ダニの群がるササ原をかき分け、やっと山の上へたどり着いたら、木立がじゃまして湿原に木の葉モザイクをかけていたりと、さんざんでした（あれ、また懐古談！）。

つまり、地上からは、湿原の高い草や樹木に遮られ、繁殖の状態を知るのはとても難しいのです。ところが、空からなら、巣は地上に造られ屋根はないので、まる見え。しかも、茶色い枯れ草や新緑の中の白い点なので、200-300 mの高度から肉眼でも容易に見つけられます。白いゴルフボールが、地の色と対比して見やすいのと同じです。

ここで、突然ですが、問題を一つ。写真 1 を見てください。約 250m の高さから撮ったこの写真に、巣に座るタンチョウ 1 羽が写っています。どこに？？！！（答えは 4 ページ）。見つけやすいといっても、実際はこんな感じです。

空からの調査は、地上のそれに比べて時間と労力が段違い。したがって、広範囲の調査には、今のところ最も有効な手段です。が、万能とまではいきません。多くは一瞬のうちにポイントを過ぎる！光の具合がよいときばかりと限らない！天気が悪い（雲が低い、風が強い、霧がでる）と飛べない！機体の正面や直下に死角（セスナ機）がある！経費がかさむ！そして最大の弱点ですが、調査員が酔って集中力が落ちる！などなどです。

それを解消するには、どうすればよいでしょう。今は、衛星を使うと地上のものが 50cm 単位で識別可能ですから、いずれは机の上のモニターに映る衛星画像と、ツルの白い羽が反射する波長を検知して、座ったままで簡単にツルを見つけられるかもしれません。しかし、それまでは、酔い止めの“おまじない”をこめかみに張り、“紙袋”（嘔吐用）を抱えて飛び回るしか手はなさそうです。

機上で何をしているか？

次に、飛行機は何を使うのか、です。
最初のころは、翼が座席の下にある低翼パイパー機なども使いましたが、やはり下を見るには不便で、現在は翼が座席の上にあるセスナ機 4 人乗りか、場合によってはヘリコプターです。セスナ機や 4 人乗りのヘリコプターなどは、300 mほどの飛行高度ですと、ツルにほとんど影響を与えません。しかし、8 人乗りヘリコプターぐらいになると、ツルも警戒するし、それよりも農家の牛・馬が驚いて暴走するので、むしろそちらへ神経を使うことになります。

では、飛行機の上で何をしているか、です。
4 人乗りの場合、一人は操縦。もちろん専門のパイロッ

写真 1　巣はどこに？

トがやります。前席の一人は、パイロットに航路の指示を出しながら、テープレコーダーを使いツルの発見状況を実況録音します。後部席の一人は５万分の１地形図を広げ、そこに航跡や発見位置、羽数、時刻などを書き込みます。反対の席の一人は、窓を開け、ひたすらビデオカメラを構えて撮り続け、ツルを見つけたらスチルカメラに持ち替え、ツルとその周辺を写します（それが写真1)。もちろんこの４人とも、目をこらして眼下のツルを絶えず探します。

１フライトは４～５時間が標準ですので、その間、揺れる狭い機内で集中力を持続しなければない、過酷な作業です。誰かがツルを発見すると、エンジン音に負けまいと大声で怒鳴り、飛行機はその発見物へ向けて旋回します。

こうした作業で得られた資料は、地上に降りてから営巣地点の確認、発見状況の再検討、リスト作成、写真記録の名称附記など、こまごまとした根気のいる作業を経て、基礎となる表が作られます。

営巣のほとんどは４月に始まった

さて、やっと今年の成果をお話しするところまできました。

調査は４月と５月の中･下旬にそれぞれ１回ずつ実施。1回といっても、1度に全部の地域は飛べないので、1週間ほど連続して飛ぶのをまとめて1回と呼んでいます。飛んだ地域ごとに名前を付けているので、地図（図1）をご覧ください。十勝の大樹海岸沿いから十勝川や支流などを含む「十勝」のほかに、皆それぞれ地域を代表する地名､つまり｢釧路湿原（とその周辺)｣､｢別寒辺牛川（流域と厚岸湖)｣、「霧多布湿原（と周辺湖沼)｣、「根室半島（全域)｣､｢風蓮湖（とそこへ流れ込む河や周辺河川)｣､｢野付半島（とその付近で西から東へ流れる河川)｣、それに「網走（斜里から興部までのオホーツク海沿岸)」と「宗谷（サロベツ原野やクッチャロ湖など)」を、それぞれを「地区」と名付けています。正確には、何々地区と書くべきですが、面倒なので、以下では地区を略しておきます。

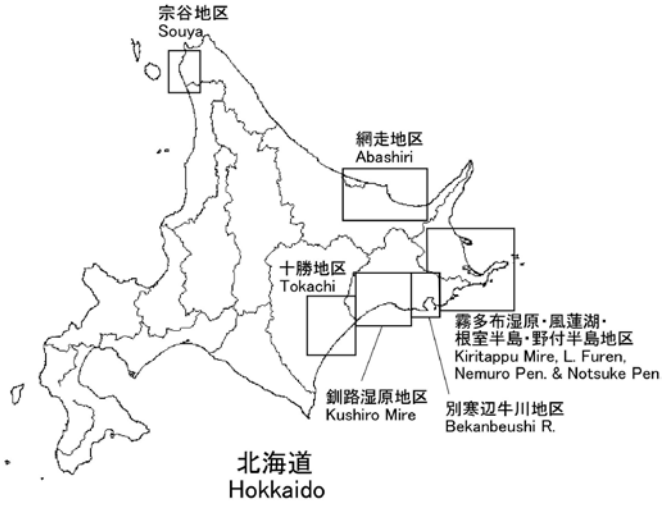

図１　飛行調査した地区（2007）

ところで、今年の産卵はいつ始まったでしょう。４月の調査で、すでに雛を連れていた夫婦が２組いたので、逆算すると３月に産卵していないと理に合いません。実は､気の早い夫婦が３月の下旬から営巣･産卵することは、数年前から知られていました。しかも、少なくとも１組は同じつがいと思われます。しかし、その夫婦に標識が付けられないので、残念ながら確認は取れません。

それはともかく、いつ繁殖活動が記録されたか（繁殖開始とイコールではないが、おおよその傾向は同じ）をみると､図２のようになります。ただし､4月の記録には、３月に営巣して失敗したのも含まれるかもしれないので、気の早い組の割合はもう少し多いかもしれません。いずれにしても､気の早い組は少数派で､大多数は４月になって産卵を始めました。

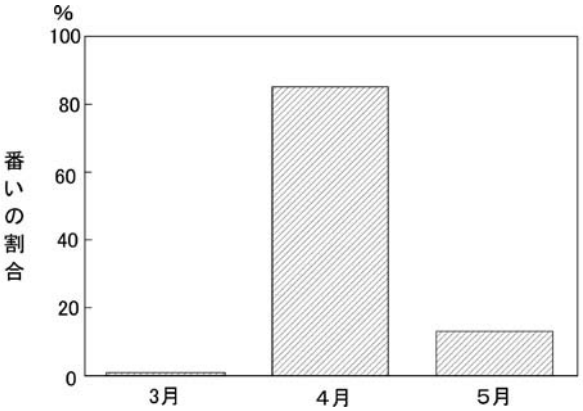

図２　番いはいつ営巣を始めたか（2007）

今年の繁殖は 354 つがい

それでは、今年はどれだけの夫婦が営巣したでしょう。繁殖した夫婦の数を 1998 年から 10 年間でみると、次第に増えているのが分かります（図3)。そして今年はついに 354 組にまでなりました。この増加は、全体の羽数が増えているので、当然といえば当然です。

そのうち一番多いのは、釧路湿原の 123 組で、少ないのは宗谷の１組です（図4)。釧路湿原ではこれまで 101 組が最多でしたから、あっさり記録は塗り変えられました。でも、多い少ないだけで地区を比べるのは不公平です。なぜなら、湿地の広さが地区ごとに異なるからです。

そこで、今残っている湿地の面積を基にして、単位湿

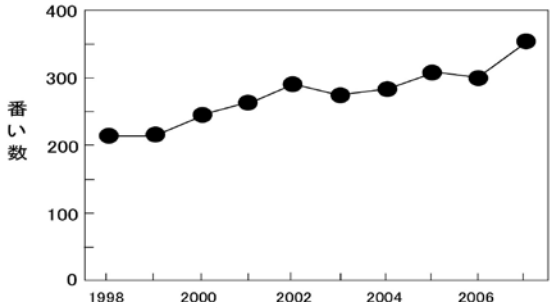

図３　最近 10 年間の繁殖番い数

地面積あたりのつがい数（密度）を計算してみると、十勝にいる数は釧路湿原の半分にも足りないのに、釧路湿原の 3.6 倍も混み合っていることになります（図 4)。根室の各地区に比べても、釧路湿原の混みぐあいは低いことから、これからもっと夫婦の数が増えたら、どこが混んでくるかの予想が立てられそうです。

しかし、さらにどんどん混んできたらどうなるでしょう。例えていえば、満員になったら、隣の車両へ移るか、別の電車に乗るしかないのと同じです。今、タンチョウでもそうした兆候が見えてきています。その例として、釧路から 300km 以上離れた宗谷での繁殖があげられますし、今年は網走でも新たな場所で営巣が始まっていました。

写真２　巣はここにあった

樹林のなかに 5%の巣

では、彼らはいったい、どんなところに新しく巣を造るのでしょうか。一つの手がかりは、今どんなところに巣を造っているかを知ることです。そこで、試しに営巣環境をいくつかのタイプに分け、それぞれに含まれる巣を集計しました。すると、わりと開けた環境（図５の E1、E2、E5）に巣を造ったのが７割ほどでした。確かにこれは、タンチョウは広い湿原に巣を造る、というイメージに合っています。

しかし、林に囲まれた小さな湿地や、なかには木立の混んだ樹林の中に巣を構えるのもいます。今年はそんな巣が３割もあり、特に樹林の中の巣は 19 ヶ所（全体の 5.4％）もありました。こうした巣は空からも見つけにくいため、実際はもっとたくさんあると思っています。これらのことが、タンチョウの繁殖地のために、どのような環境を保持すべきかについて、重要なヒントを与えてくれます。

もう一度、写真　１をご覧ください。広々とした湿原とはまるでイメージが違い、農地に囲まれて、細い川が流れています。そして、その水辺に巣があります（写真２)。こうしたところで巣を構えざるを得ない状況に、現在のタンチョウがあることを如実に物語る写真です。

さて、本来なら初めにお伝えすべきであった、なぜ飛行調査をするの？という目的を、締めくくりに記しておきます。私たちは、現在のタンチョウがどのような状況に置かれているかをとらえ、そこから、タンチョウと人が共存するのに、どのような手だてを講ずればよいかを考えねばなりません。しかも、その考えを実践に移さなくては意味がありません。そのためのモニタリングを兼ねた基礎的な事実の把握、それがこの調査の直接目的であり、適切な保護策を立てて実行することが究極目的なのです。

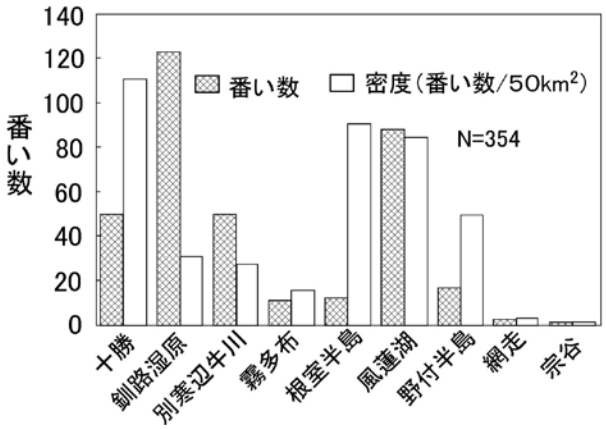

図４　各地区の繁殖番い数と混み合い具合（2007）

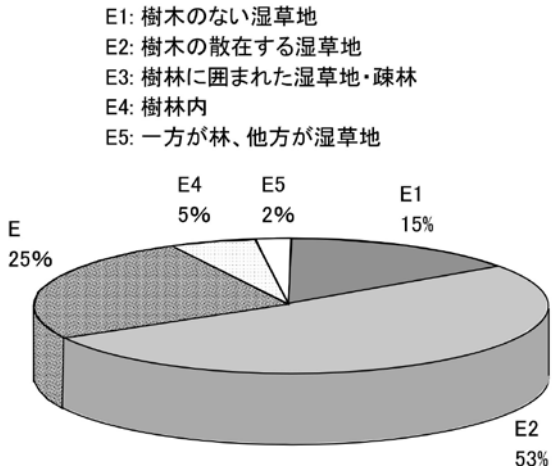

図５　巣のあった環境（2007）

第０話「タンチョウの名前」

西岡　秀観

皆さん、はじめまして、西岡秀観と申します。

私は、標識タンチョウの観察と記録写真の撮影をしております。今回、タンチョウ保護研究グループが設立されたことに伴い、今までに標識タンチョウを観察していて気づいたエピソードや、生息状況について随時紹介させていただきます。

写真１：旧標識
（右足にメタルリング、左足にプラスチックリング）

写真２：新標識
（右足だけに装着、軽量金属製）

表題にある「名前の付いたタンチョウ」とはどういうことだと思いますか？

「ピーちゃん」とか「コーちゃん」といった事ではありません。

給餌場等でタンチョウをよく見ると、下の写真のように足に何か付いているのが何羽かいることに気づきます。

これが標識で、そこに記されている番号が、付けられたタンチョウの名前というわけです。おわかりいただけましたか。

この名前のおかげで、人間の目では外見の違いがわからない（タンチョウ同士は見分けがつくらしい・・・）タンチョウでも「あっ、あいつだ！」と判別できます。

また、この２種類の他に動物園で保護、繁殖した個体を野生復帰させる際に付けた標識（新標識型で、色つき）もあり、道内（国内？）のタンチョウには全部で３種類の標識が付いていることになります。

第１話「T09、T31」

T09（最年長のお母さん）

T09 は、1990 年生まれのメスで、現在確認されているタンチョウの中で最年長の 17 歳です。昨シーズンは、1 羽の幼鳥を連れて給餌場に現れ、自然下での生存最年長記録どころか繁殖記録まで更新し、関係者を驚かせました。前回の説明を覚えている方は写真を見て「あれ？」と思われたかもしれませんが、黄色のプラスチックリングがありません。

なぜかというと、プラスチックが劣化して外れてし

T09 の家族（左：T09、中：旦那さん、右：幼鳥）
2007 年 2 月撮影

まったためです。では、どうやって識別するかというと、この標識はプラスチックとメタルで１組になっているので、「Ｔ０９の標識」の写真のようにメタルリングの刻印の数字を読みます。これがなかなか大変で、慣れた人でも望遠鏡で読むのがやっとで、双眼鏡では無理です。T09 以外にもメタルリングだけになっている個体が９羽いるので、この作業はとても重要です。ぜひ、皆さんも機会がありましたら挑戦してみて下さい。これからも最年長記録を更新し、今シーズンも幼鳥を連れて給餌場に来てほしいと願っています。

T09 の標識（150-0609）

T31（鶴界１のオシドリ夫婦と現在は・・・）

T31 は、1991 年生まれのオスで、1994 年３歳の時に同い年の T33 とペアになり、2005 年まで 11 年間ずっと一緒に給餌場に来ていたオシドリ夫婦（タンチョウなのに？）でした。

性格がおとなしいのか、給餌場に来ても端の方に２羽で寄り添いながらひっそりと餌を食べていました。ペアになっても、しばらく幼鳥を連れてこなかったので、「ダメかな・・・」と思われていましたが、2000 年秋に初めて幼鳥を給餌場に連れてきた時には「やった！」と喜んだものです。しかし、2005 年秋になって、それまで一緒だった T33 がいなくなり、1 羽で給餌場に現れ、「もしかして・・・」と心配になりました。

結局、いつまで待っても T33 は姿を現しませんでした。1 羽になった T31 は、給餌場でもさびしそうにしていて、メスと思われる個体が寄ってきてもイジケタまま・・・。見守る関係者は「かわいそうだけど、新しい彼女でもできれば」と応援していました。年が明けて 2006 年２月、寄っていったメスかどうかはわかりませんが、新しい彼女ができたようです（右写真）。

T31：2006 年 12 月撮影

写真と同日には、ペアである証拠の鳴き合いも確認され、見守っていた関係者一同は「よかった、来シーズンには幼鳥を連れて来てほしい」と願いましたが、同年秋には２羽だけで飛来しました。「とりあえず、別れていなかっただけでもいいか･･･。来シーズンこそ子連れで」と新たな期待をさせてくれるヤツです。

次回は、標識物語第２話「T68 と T77（鳴き合いとは・・・）、T94（魔性の女）」を掲載します、お楽しみに。

T31（右）と新パートナー（左）　2006 年２月撮影

お　知　ら　せ

11 月 18-23 日に、地球環境基金の助成を得て、国際会議「タンチョウ保護のための国際プロジェクト」を行います。会議そのものは非公開で行いますが、**11 月 22 日（金）14：00 より釧路市博物館で会議参加者による講演会**を開きます。**講演者や講演内容についての詳しいことについては、ホームページでご案内します。なお、講演会は無料です。**

また、講演会の後に交流会を予定していますので、是非、ご参加下さい。会費は飲み物込み 4,500 円です。交流会に参加のご連絡は **11 月 17 日**までに事務局まで。

シリーズ　先生おしえて（ツル　Qアンド A）

Q. タンチョウの巣は毎年同じものが使われるのでしょうか。

A. いいえ、使われません。が、一見易しそうで、奥の深い質問ですね。

多くのタンチョウ夫婦は、毎年同じ繁殖地（なわばり）を使うようです。しかし、なわばり内では、毎年違う場所に、新しい巣を造るのが普通です。ただ、同じところに連続して巣を造る例がないわけでありません。その場合でも、古い巣の上に、新しい材料で、新しく巣を造ります。巣材はおもに枯れ草（ヨシとかスゲ）なので、一冬越した巣は使い物にならないからです。

では、なぜ同じところに巣を造ることがあるのでしょう。これまでの例では、巣を造る場所が非常に限られたなわばりで、それが起きています。営巣場所の限られることが、同じ営巣地点を使うひとつの要因なのでしょう。

それなら逆に、多くの夫婦はなぜ毎年違うところに巣を造るのでしょうか。いつも同じところだと、敵に知られやすいからか、それとも、巣造りをする最もよい条件のところが、毎年変わるからか、いや、単に気まぐれで・・・。残念ながら、これはまだ謎です。

世界のツルの現場から

昨年（2006 年）10 月、ハンガリーで開かれたヨーロッパ・ツル類研究会に出席してきました。

ヨーロッパはクロヅルの渡りシーズン真最中で、行きと帰りとに短期間滞在したドイツでも、会場のハンガリー・ホルトバイ国立公園でも数万羽単位の群れを堪能しました。その際のツルの様子については別の機会に紹介したいと思っていますが、今回は研究会の様子についてお知らせします。

会議への正式参加者は、ヨーロッパ 14 カ国およびアジア 3 カ国からの計 78 名でした。ドイツからの参加が 21 名と最も多く、次いでスペイン、スウェーデンからの参加者が目立っていました。参加者の多くはアマチュアですが、すっかりツルに入れ込んでいる常連の参加者が多く、会場内外の雰囲気は同窓会のようでもありました。

国立公園のビジターハウスで正味 3 日間行われた発表は、各国の状況報告に加え、換羽、繁殖数の変化、音声による番い識別の試み、農業との関係など多岐にわたっていました。また渡りの様子などを調べるために標識として装着する国別のカラーコンビネーションの調整、ヨーロッパ・ツル類研究会の代表選出などの事務的な話し合いもありました。

研究会は 3 ～ 4 年毎に各国持ち回りで開かれていて、次回はフィンランドでの開催（実施年は未定）が決まりました。

（百瀬邦和）

事務局だより

< 活動記録 >

2006 年

11 月 12 日　17 名出席のうえ設立総会（於：中部地区コミュニティーセンター、釧路市）

12 月 11 日　法人認証申請書を北海道知事宛に提出

2007 年

3 月 20 日　法人として認証され、26 日に到着

3 月 30 日　法人設立登記申請書を釧路地方法務局あて提出

4 月 03 日　設立登記完了（3 月 30 日付）

5 月 20 日　理事会開催（於:釧路市民活動センター）

6 月 15 日　講演会開催（於：釧路市生涯学習センター）

演者：寺岡宏樹（本会理事）、「道東におけるタンチョウの生息環境：重金属汚染の状況」

6 月 16 日　タンチョウ標識調査説明会（於：釧路市民活動センター）

6 月 17 日　タンチョウ標識調査説明会（於：帯広百年記念館）

6 月 26 日　ホームページ開設

< 調査活動（事業）>

・ タンチョウ繁殖状況調査（航空機による調査）

タンチョウの生息地全域を航空機で飛び、巣、家族、その他の群やつがい数とその位置などを確認する調査。4 月と 5 月は道東地域のほぼ全域を対象とし、6、7、8 月は鶴居村の一部のみを調査。タン保研の独自調査に加え、一部は釧路開発建設部の委託によるもので、環境省による調査を含めた全体の調査結果については、本誌 2 ページの記事を参照。

・ タンチョウ標識調査

6 月 23 日より 8 月 05 日までに 15 日間調査を行う。今年は 75 名、のべ 208 名のボランティアでの参加があり、21 羽のヒナに標識を付けた。

・ 標津川タンチョウ営巣状況調査：7 ～ 8 月

釧路開発建設部から急遽持ち込まれた調査。標津川の自然再生事業としての蛇行化工事にあたっての現地調査の際、当地で繁殖しているタンチョウ家族にどのような配慮が必要かという確認のための調査。

・ タンチョウ自然再生調査

環境省委託による釧路湿原自然再生事業 野生生物生息･生育環境保全（タンチョウ）調査。タンチョウの生息環境を改善するためにはどんな自然再生事業を行う必要があるのか、という目的の調査事業。繁殖期の調査として､数つがいの終日追跡観察、営巣環境の現地調査、索餌場での餌動物調査を行っている。この調査は越冬期も実施を予定。

< 役員および会員 >

今年度の役員と、現在の会員数は以下の通りです。

役員（任期は今年度末の 2008 年 3 月 31 日まで）

理事：　石弘之、胡東宇、寺岡宏樹、花輪伸一 . 正富宏之、正富欣之（副理事長）、宮田春夫、百瀬邦和（理事長）、山根みどり、　監事：蛭田眞一、宮崎俊次

会員（9 月 20 日現在）

運営会員：8 名（北海道）、 1 名（兵庫県）　サポート会員:40 名（北海道 30 名, 大阪府･兵庫県:各 3 名, 茨城県・東京都・神奈川県・京都府：各 1 名）　団体サポート会員:4 団体(北海道 3 団体，　大阪府 1 団体)

Tancho Protection Group (TPG) newsletter　TANCHO

First issue　September 2007

特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ

〒 085-0036
北海道釧路市若竹町 10 番 2 号
Tel/Fax 0154-22-1993

e-mail: tancho1213@pop6.marimo.or.jp
URL: http://www6.marimo.or.jp/tancho1213